

Z世代と「共感」に関する探索的研究

—コミュニケーションにおける「指向」への着目—

中川晃 (AKIRA, Nakagawa)

Keywords : Z世代、共感、コミュニケーション、若者論

1 目的

本研究の目的は、「Z世代の共感」が「一般的な共感」に対し特異性を有している可能性を示唆することである。「一般的な共感」とは、他者と喜怒哀楽といった感情を共有する事を指し、学術的には「情動的共感」と「認知的共感」の二つに大別される。しかしながら、研究者が行ったプレ調査において、「Z世代の共感」は上記のいずれにも当てはまらない事象が確認された。そのため、「Z世代の共感」を探究し、「一般的な共感」と相違が存在することを見出す事を目的とした。

2 方法

本研究の調査・分析方法は以下のように実施した。研究目的は「共感」の解釈が異なる事を示唆することにあるため、「一般的な共感」と「Z世代の共感」の比較検証を行なった。

- ① 「一般的な共感」: 既存研究が多く存在するため、文献調査を中心に実施した。
- ② 「Z世代の共感」: Z世代 28名へのインタビュー調査、テキストマイニングによる分析を実施。
- ③ 上記 ①、②の比較検証を行い、両者の相違を探った。

3 結果

調査・分析の結果、「一般的な共感」は共感相手の内容を自身が理解し、共有する「共感相手→自身」という指向になる事が確認された。他方、「Z世代の共感」は調査対象者 28名の内、13名(46%)が自身の思考や趣向と合致する相手に対してのみ共感の感情を抱く、「自身→共感相手」という指向となる事が確認された。尚、Z世代への調査において、従来の「共感相手→自身」の指向は3名(1%)、「どちらとも言えない」が12名(43%)という結果であった。

4 結論

以上により、「一般的な共感」と「Z世代の共感」は共有において指向が異なる可能性が確認された。即ち、Z世代は「共感」に対し、従来の「共感」の概念と異なる独自の解釈を有しており、自身と思考が一致する相手に対して「共感」を感じている可能性があると言えよう。

【主要参考文献】

- 梅田聡・安西祐一郎(2014). 『共感』. 岩波書店, 256p.
- 小河(2016). 「音楽聴取時における歌詞の有無と共感性が感情変化に及ぼす影響」『東海学院大学紀要』, 10, pp. 31-38.
- ハーバード・ビジネス・レビュー編集部(2018). 『共感力』. ダイアモンド社, 140p.
- 安田(2020). 「音楽聴取による感動に及ぼす聴取者の共感性の影響」『情報処理学会』, 1, pp. 45-46.
- 山田(2020). 「共感力がレジリエンスに与える影～オタクとオタク非自認者に着目して～」『上越教育大学研究紀要』第40巻, 第2号. pp. 473-482.
- 渡部淳(2020). 「共感の共同体と自然回帰する若者たちの新しい本質主義-デジタル情報空間における感情の波及と伝統への再接触-」『北海道文教大学論集』, 21, pp. 29-46.